



なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No.52

「歴史」の学年末試験の範囲

(1)【ノート提出】 これまでと同様に、試験当日にノート提出を求めます。必ず、ノート整理をしておいてください。

(2)【教科書と「なんでやねん」のテスト範囲】

教科書の範囲は、p.48～p.51、p.66～p.79です。

「なんでやねん」は、No.49～No.51の内容から、授業で扱ったことを中心に出題。

『チャート式』では、p.38からp.42及びp.44からp.63が試験範囲です。

(3)【知識・理解に関すること】 … 教科書をよく読むこと。特に、重要なことは次の通り。

平安京、桓武天皇の政治、蝦夷の抵抗と征夷大將軍・坂上田村麻呂、最澄と空海、東アジアの変化と遣唐使の停止、藤原氏の摂関政治、国風文化、浄土信仰と阿弥陀堂、武士団、荘園の寄進、源氏と平氏、奥州藤原氏、院政と武士、保元の乱と平治の乱、平清盛、源頼朝、源義経、鎌倉幕府、守護と地頭、鎌倉幕府の仕組み、將軍と御家人の関係、御恩と奉公、後鳥羽上皇、承久の乱、六波羅探題、執権政治、北条泰時、御成敗式目(貞永式目)、地頭の支配、朝廷と鎌倉幕府による農民の二重支配、武士の生活、二毛作、定期市、鎌倉文化の特徴、鎌倉仏教、法然(浄土宗)、親鸞(浄土真宗)、一遍(時宗)、日蓮(法華宗)、栄西(臨済宗)、道元(曹洞宗)、モンゴル帝国の拡大、元寇(文永の役、弘安の役)、徳政令(永仁の徳政令)、後醍醐天皇、楠木正成、足利尊氏、建武の新政、南北朝時代、室町幕府、足利義満、室町幕府の仕組み、管領、守護大名。

(4)【資料活用技能に関すること】 … 図版や統計、「古文書(昔の書き物)」、説明文などを読み取ったり、調べたことを整理できるようにしておきましょう。

鎌倉幕府の仕組みや、荘園の仕組みを説明できるように、教科書の図版をていねいに見て、説明できるようにしておいて下さい。

また、教科書p.71の「北条政子の訴え」と「御成敗式目」の意味を説明できるようにしておくことも大切です。

なお、鴨長明の『方丈記』の読み取りを作文課題にします。源氏と平氏の争乱が民衆にもたらした被害を読み取って下さい。また、物流が止まり、飢饉になるとお金も役に立たなくなったことを説明できるようにしておいて下さい(作文のヒント)。

(5)【思考・判断に関すること】…今回は、鎌倉時代の民衆の暮らしについて、農業生産の高まりが、何に支えられ、どのように商工業の発達につながったのかをテーマに出題します。鎌倉時代の厳しさを乗り越えた民衆の努力を、事実を基にして考えましょう。

(6)【表現(関心・意欲・態度)に関すること】今回は次の課題で「作文」を出題します。

【課題】中学生1年生のあなたの近所には、小学校6年生の子どもたちがいます。その小学生たちが、あなたに源氏と平氏が戦った頃の人々の様子について教えて欲しいと言ってきました。

あなたは中学校の歴史の授業で読んだ次の史料を思い出しました。それは、日本三大随筆の一つとされる随筆(現代語訳)の一部です。あなたは、史料の背景にあったことと、史料に書かれていることを元に説明しようと思います。

そこで、史料の背景を簡単に説明し、史料の内から、特に印象に残るところ(段落あるいは言葉)を2つ以上引用し、引用したことに説明を加えて、小学生たちに伝えたい事実と、自分の気持ちを説明する文章を書きなさい。

※ 引用：自分の考えを説明するために、他の人の文章などを引いて利用すること。

養和年間のことだったか、もう年の記憶もはつきりしないが、二年間というものの、飢饉で、ひどいことがあった。春・夏、雨が降らなかつたり、秋、台風・水害など、運の悪いことが続いて、農作物がみんなだめになり、夏の田植えの行事だけがあつて、秋・冬のとり入れのにぎわいはない。そのため、諸国の農民で、土地を捨てて国ざかいを出る者や、家を捨てて山に入つてしまう者が出てきた。朝廷では、いろいろな御祈禱がはじまつて、尋常一様でない特別な御修法が種々なされたけれども、いつこうにそのききめがない。京という所は、とにかく何をしても、先だつものは田舎から米が来ることであつて、それを命の綱にしているのに、それがぜんぜん来なくなつたのだから、いつまで世間体ばかりつくろつていられようか。早く立ち直ればいいがと心の中では願いつつも、どうにもならないままに、いろいろな家財を片端から捨てるように安く売つて食料に代えてゆくのだが、これはたいした物だと掘り出してくれる人もいない。第一、振り向いても見えない。ときたま換えてもらつても、金目のものが金目にならず、食料のほうが高くつく。乞食が道ばたに多くなり、どこへ行つても不平と嘆息の聲ばかり。

第一年は、こんな調子で、やつと過ぎた。翌年は何とかなるかと思つてみると、反対で、そのうえに伝染病まで加わつて、いよいよ向かう様子はちつとも見えない。(中略)

しまいに、笠をかぶり、足をくるんで、かなりの身分らしいかつこの者が、ただただ、ひもじさに一軒一軒食を乞うて回るようになった。こんなに落ちぶれて、どうしていいかわからなくなつた者たちが、歩いていかたかと思つと、ばたと倒れて、もう死んでいる。土塀のそばや、道ばたに、そういう餓死者が無数にあつた。その死骸を取り除く手段も分らないので、死体から出る死臭が都に広がり、腐爛して変わり果てていく死体の容貌や姿は、あまりにひどくて見ていられないことが多かった。賀茂の河原なんかでは、死体が多く捨てられて、馬や車も通れないほどだ。(中略)

しかしまた、たいそう哀れなこともあつた。別れられない妻や夫をもつた者は、愛情のより深い者のほうがきつと先に死ぬ。というのは、自分のことは二の次にして、相手がかわいそうだと思つたために、たまに手に入れた食物を相手に先に食べさせるからである。だから、親子でいっしょにいるものは、きまつて、親が先に死んだ。また、母の息が絶えているのも知らずに乳のみ児が、乳房にとりついてるようなこともあつた。(中略)

(餓死者の数を数えたところ、四月と五月で、京の一条から九条まで、東京極から朱雀大路まで、つまり平安京の東半分の死体が、計四万二千三百余体あつた。三月以前、六月以後に死んだ者も多いし、賀茂川の河原、その東の白河、あるいは朱雀から西の京、その他、方々の郊外まで加算したら、きりがないうちにちがいない。まして、畿外の諸国まで加えたら、どういふことになるうか。